

フタコイ

はちみつレモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小さなころ絵本を悲しそうな様子で読んでいた女の子に初恋を抱いていて再会の時に告白をすると約束し、その場を去った。

そして8年後ひよんとしたことからその女の子と再会をを果たすが約束には続きがあった。

よう実要素は一之瀬だけです。キャラ考えるのが面倒くさかったので他のところから抜き出しました。まあ友人枠とか後輩枠で入れるかもしれませんが。

目次

プロローグ	1
再会	4

プロローグ

「なによんでるの?」

「えっ?」

「そのほん、かなしそうにしてたから。」

小さい頃の旅行先。義理の兄と絵を描いていて少しだけ時間をかけていたので先に帰ってしまった兄と逸れて探しているとき、とある開けた場所で悲しそうに岩の上で絵本を読んでいた女の子と出会った。

「このえほんのさいごがともかなしくて。」

「…さいご?」

「うん。おうじさまがしんじやうの。おしめさまとはなればなれになつて。さいごはおひめさまもしんじやうの。」

その本を見ると確かに結末が死に別れだったはずだ。悲しそうな女の子を見るとどこかかわいそうで見ていられなくなった。

「せつかくカギがあるなら。：なあちよつとかしてもらつていい?」

「えっ?」

あの時から絵を描くのは好きだった。色鉛筆と画用紙で本当のエンディングを書き足していく。その女の子は俺を覗きながらじつと完成するのを待っていた。そして数十分後、画用紙と最後のページをちぎりその後ろにつけるとその女の子はもう一度その本を読み直した。

「これでどうかな?」

「わあく!!うん。すぐつくすてきなおはなし。」

恐る恐る聞くとその女の子は目を輝かしていた。たった1ページをで話をハーピーエンドに書き換えただけにその女の子は嬉しそうに笑った。多分これが俺が原点だっただろう。俺は子供だったこともありその女の子の笑顔にドキツとしてしまった。

「あなた名前は?」

「ボク?ボクは一条夜。きみは?」

じつと目を向けられたのが照れ臭くてあの当時は目を背けながら

名前を聞いた。

そして名前は未だに覚えている。

「わたしは——。よろしくね。よるくん。」

「よろしくね。——ちゃん。」

嬉しそうに笑顔であったその女の子に視線が吸い込まれ、顔が赤くなったのを覚えている。そしてそこから兄である一条樂繋がり多くの人と友達になっていた。そして皆で遊んでいて二人きりの時間はほとんどなかったが、それでも毎日のように遊んでいた。でもいずれ別れはやってくる。

「よるくん。どうかな?」

「それってハズレのかぎだよね? いいの? おにいちゃんのことすきじゃないの? め」

「すきだよ。でもわたしのすきは——ちゃんと——ちゃんとはちがうから。」

「……そっか。それじゃあ。ボクからこれ。」

そして一枚の画用紙を切り取り渡す。そしてこさきお姉ちゃんがその絵を見る。

そこにはいつも遊んでいた描いていたはずだった。

「どうかな?」

「…これってわたしたち?」

「うん。やどでかいてたんだ。ちよつとおかあさんにてつだつてもらったけど。」

「とてもじょうずだね。すごいよ。でもさんにん?」

「ほんとはみんなのもかいてたけど……みんなはあのものがたりのヤクソクにむちゆうだったから。でも——ちゃんにもあげれたかな」

だから画用紙に描いたきり渡せなかった。結局楽ばかりモテて俺は友達止まりだったのだ。

「…ありがとう。よるくん。ほんとうにうれしい。」

「よかった。」

「そうだ。よるくん。」

「なに?」

「わたしね。よるくんのごとがすきだったの。」

その言葉にあの時の言葉は嬉しかった。表情を隠すのが下手だったのでなおさら顔が真っ赤になって回答しよう。

「ボクもーのこと、好きだったよ。」

「ほんと?」

「うん。」

照れているので話は繋がらなかったのだろう。お互いに顔を見合わせ顔が真っ赤になっていた。

「ねえ。らくくんとーちゃんみたいじゃないけど…」

そして連れられた場所は初めて会った場所だった。開けたところにたった一つ大きな岩がありその岩の上で女の子が本を読んでいた場所だ。そんな時親父の声が聞こえてきた

「ヨル!!帰るぞ!!」

「ちよつと待って。ーちゃん。」

「よるくん。もし、さいかいできたならまた2人でここにこよう!!そしてこんどはヨルくんからスキっていつてくれないかな?」

「うん。ヤクソクする。」

これが自分の初恋。そしてたった数週間だったけど…ずっと大切だった思い出であった。そして、中学入学してからも叶うはずがないと思っていた。

でも物語はここから始まるのである。

再会

「……とりあえず今日の授業はここまで。」

「一条くん今日一緒に食べないかな？」

学校のチャイムがなり午前中の授業が終わると同時に俺はいつもの通り色鉛筆と画用紙を持って移動しようとする隣席の一之瀬帆波こと委員長が話しかけてくる。

「パス。絵描きに行くから。」

「むく。前にご飯一緒にしてくれるっていつてたのに。」

「今日で絵が完成しそうなんだよ。てか今週末お前の家に行くって夏帆ちゃんに伝えてあるだろ？その時でいいだろ。」

「絵って。本当に好きなんだね。」

「まあな。それにお前今日誘われてただろ？他の奴と食べても気を使われるだけだからいい。んじゃ。」

「えつちよつと!!」

「帆波ちゃん!!いこ!!」

あれから既に8年が経つ。

8年経った俺はいつもの通りに購買で買ったパンを食べながら食堂の机で絵を描いていた。

中学生になって一年が経った。そして俺の周りには人は近寄ろうとせず昼でも関わらず人がいない。家が集英組というヤクザってこともあり、人はもともと小学生くらいから友達はおろか近く人すらほとんどいないのである。だから思う存分好きなことに没頭できた。「できた。」

食堂の風景を描いた絵は今まででも上手く描けている方だと思う。あの時からずっと絵を描いたり、絵本を作ったりしている。小学校の時に校内学習で絵本を作って公民館の図書館で発表するというクラス発表があったときり毎週土曜に作った絵本の読み聞かせを行うなど比較的町内では受け入れられているが……。

「また何か書いてるよ。」

「もしかして果たし状とか書いてるんじゃないの？」

様々な言われようだが時々だが話しかけてくれる人がいるから平気である。

少し思うことはあるが別に構わない。俺は既にこの道で生きていくことは決めているからだ。

母さんが海外で活躍している絵本作家であるため長期休みの間修行に行っており、英語やドイツ語などを取得していることもあり海外を基本とした絵本作家として活動したいのだ。相変わらず絵を描くが絵の具を使った絵は苦手でありずっと色鉛筆で描いている。そっちの方が幼児にも人気なのもあるのだが、手軽に風景や細部まで描ける色鉛筆が俺の手にはあっていた。

そして新たに画用紙を出そうとした時だった。

「あっ！」

そんな声が後ろから聞こえてくると同時に頭部に何やら訳がわからないがぬるぬる？ドロドロとした液体が降りかかった。

それは湯気がたっており、多分出来立ての学食の料理だと思ったと同時に頭部から熱と激痛が襲いかかった。

「あっつ!!」

俺は反射的に立ち上がりすぐに洗面台に向かう。食堂の端に座っていたこともありすぐに頭を水で冷やすと笑い声とざわざわとした声が聞こえてくる。頭部から料理をかかり面白いことになっているのは分かるけど…流石にこっちは笑えないのだが。洗っているとぬるぬるとしたものとベタベタとくっついて粘り気を出している多分ご飯らしきものが頭の上に掛けられたのであろう。悪気はなかったのか慌てた様子で俺に話しかけてくる。

「ご、ごめんなさい!!大丈夫?」

「……大丈夫だけどちょっと待って。できればタオルが欲しいんだけど。」

「う、うん。ちょっと待って。」

「もう持ってきてるわよ。」

「すみません。蛇口も止めてくれたら助かります。」

とどうやら女性の二人組みらしい。俺は水が止まったのを確認し

てタオルを受け取ると頭を拭く。

ぬるぬるとしたものはなくなつたがまだ頭がご飯でくつついているところがあるので帰ったらすぐにお風呂に入らなければならぬだろう。ある程度乾いたので顔を上げるとそこには、どこか見覚えのあるショートカットの可愛い女の子とポニーテールでメガネをかけた女の子が心配そうに見ていた。

「あの、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「大丈夫。体は丈夫だから。そっちも大丈夫？やけどとかしてない？」

「うん。大丈夫だけど…。」

どうやらネクタイの色から同じ年だと思われる女性は怪我がないらしいが膝が赤くなっている。おそらく転んで何か井を俺にぶつかけたのであろう。俺は小さくため息を吐き食堂の知り合いのおばちゃんに告げる。

「赤坂のおばちゃん。やっぱり危険だつて。実際被害あつたし。」

「ごめんねえ。う〜ん。やっぱり事務の人に相談した方がいいわね。始末は私がやるから」

「危険？」

「そのこのタイル半分外れちゃつて段差ができてるんだよ。いつも俺がここ座っていることもあつて周囲に人が来なかつたし、下を見てないと気づかないからあまり目立たないけど。」

絵を描いている途中気づいていたことである。一タイルだけでいるが少しだけ剥がれ躓きやすくなっていたのだ。

「でも服は着替えた方がいいわよ。流石にそのまま授業に出れるわけではないでしょ？」

「…まあ気持ち悪いのは事実ですけど。着替えないので。」

「うう。ごめんね。クリーニング代は払うから。」

「あく。これくらいなら洗濯でなんとかなるんで平気ですよ。家生憎ヤクザなもんで。設備がしっかりしているんで。」

「…えっ？もしかして一条くんの。」

「弟です。」

本当は義理がつくけど。小さいころであるが元々俺は捨て子だったらしい。

なので誕生日も拾った日を誕生日にしていたはずなので俺が正式に生まれた日は分からないらしい。

そういえば……少しだけ気になったことがある。

「…あの、どこかお会いしたことありますか？」

「えっ?もしかして私の家が和菓子屋やってるからかな?おのでらっという和菓子屋聞いたことない?」

「楽から聞いてますけど。」

和菓子屋?俺あまり和菓子屋行かないんだけど。和菓子が嫌いってことではないが家の皆が和食を好むが俺は洋食や洋菓子を食べることが多い。だから滅多に行かないんだが。

「これ。君が描いたの?」

「えっ?」

そこには画用紙に描いてある食堂の絵が置いてある。透明なファイルに閉じてあるので見えるようになってる。

「俺のだけど。」

「……」

「どうしたの?小咲。」

「もしかしてヨルクくん?」

「…えっ?」

その言葉に俺は少しだけ固まってしまう。その名前で呼ばれるのは久しぶりだ。唯一その名前で俺を呼ぶのは旅行先であった女の子だ。

「もしかして覚えてない?」

「いや、覚えてるんですけど…小さかったから記憶が曖昧だから。もしかして旅行先で最終日に渡した絵残ってる?」

「うん!!やっぱヨルク君だ!!」

嬉しそうに俺の手を掴んでぶんぶん回し始めるぶんぶ女の子を見ってしまう。どこかほんわかと和んだ雰囲気でありながら、顔を少し赤らめ本心から嬉しそうにしている。

でも喜ぶのはいいんだけど…

「っ。小咲。喜ぶのはいいんだけど…その彼着替えないと。」

「えっ？あっごめん。」

ベタベタするしなんか丸いものが背中にはいはいりのんはいりこはいりこんで入り込んでいるけど、本当にヤクソクの女の子なのかは気になるし。しきになやくほんと

「別にいいわすれてこと、おしから。先生に事情を話して何か借りて着替えてくる。」

「あっ私も行くよ。」

「…まあいいわ。後から小咲詳しく聞かせてもらおうわよ。」

と言いながらメガネをかけた少女と別れ職員室へ向かった。